
戦闘機動隊学園 Uクラス

麒麟

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

戦闘機動隊学園 Uクラス

【Nコード】

N6329X

【作者名】

麒麟

【あらすじ】

7年前の全国同時多発テロの影響で全国で5つの戦闘機動隊学園が建てられた

基本的にはコメディー重視でやっていきたいと思いますがもしかいたらシリアスになる可能性がありますご了承ください

登場人物の雷上龍刃の設定を少し変えました。

人物紹介（前書き）

これは新しい情報が出るごとに更新していきます。

人物紹介

登場人物紹介

？1 らいじょうみかど雷上帝人 1年Uクラス

身長170？体重58？A型 生年月日7月6日 髪色 深青 能力『シャドーフレイヤ影を操る者』

希望部隊 制圧機動隊、隠密機動隊、異力機動隊

表の行動より裏方の行動を得意とする隠密タイプ、しかし普段の学園生活ではいわゆる『問題児』の称号がついており要注意人物。家族構成は母親が7年前のテロで犠牲になり、父親は消息不明、兄が1人おり現在瑞穂学園の2年生。一族の特性で怒りや興奮状態に『ハイサーカーモード戦闘狂』という状態になることがある。本人は抑えているつもりだが、一族一その状態になりやすい。性格 基本的には温厚な性格で前向きだが入学当所から色々な問題を起こしたことによりあまり良い評判はない。甘いものが好きで自分で作るという家庭的スキルを兼ね備えている。

？2 しまいはらだいですけ島茨大輔 1年Uクラス

身長173？体重60？O型 生年月日9月23日 髪色 茶髪
希望部隊 制圧機動隊、戦略機動隊

戦闘能力もそこそこあるが主に指揮する事を得意としている戦略タイプ、中等部では戦略の成績をトップで卒業している過去を持つ。帝人と同様に『問題児』の称号があたえられている。家族構成は両親をテロで亡くしている、その後引き取られたが今は学園の援助で生活している。テロに強い憎しみがあり復讐を誓っている。
性格 マイペースな行動をしていて、興味のあることしかしない、逆に興味を持ったものには全力で打ち込む性格。

? 3 東城優香 1年Uクラス

身長163? 体重?? A型 生年月日3月6日 髪色 桃色

希望部隊 特殊機動隊

今年アメリカから戻ってきた美少女。外見に似合わず特殊機動隊を志願しており、底知れぬ体力を持つ。何に感しても積極的に行動する、正義感がある少女。しかし疑うことをあまりしないのでアメリカに居た時はよく騙されて悪戯されたりしたらしい。女子にはめずらしく特殊機動隊を志望している。

? 4 西条三波 1年Uクラス

身長168? 体重 - - - ? B型 生年月日7月27日 髪色 赤黒

希望部隊 特殊機動隊

中等部のころの訓練実習で障害物を全て粉々に粉碎したことにより『破壊の女王』という二つ名がつけられた怪力少女。帝人達とは中等部のころからの知り合いらしい。他の部隊には興味がなく特殊機動隊を選んだらしい。

? 5 雷上龍刃 2年SSクラス

身長201? 体重87? A型 生年月日5月14日 髪色 金 能

力 『エレクトロニクス 雷の斬鉄剣』

所属部隊 制圧機動隊、特殊機動隊、異力機動隊

雷上帝人の兄でクラス最高位にあるSSクラスに入っている、生徒会長補佐として生徒会に身をおいている。高等部1年の時の機動隊戦闘戦争時に刀一本で敵の大將を打倒した経歴があり、今は2年近接戦闘最強の座についている。そのかわり遠距離や銃等は一切つかえない。一族の特性の『バーサーカーモード 戦闘狂』にもなることがあるが過去に『バーサーカーモード 戦闘狂』になった時、家を半壊させたことがあり、それ以降ならなようにしている。

? 6 風峰弓華 2年SSクラス

身長168?体重???AB型 生年月日4月25日 髪色 黒
能力『エアロシールド風の盾』

所属部隊 制圧機動隊、医療機動隊、異力機動隊

現瑞穂学園生徒会長で龍刃と同じくクラス最高位のSSクラスに入っている、龍刃とは1年の時からの知り合いらしい。外見は大和撫子という言葉があてはまる、全校生徒の憧れの的である。1年の機動隊戦闘戦争では遠距離からの攻撃で敵を蹴散らして龍刃が突撃するという作戦で勝利に導いた。現在は2年遠距離最強の座についている。

?7木祖島神人 きそじまかみと

身長163?体重51?A型 生年月日9月13日 髪色 緑 能力『重力からの解放』

希望部隊 不明

7年前のテロ時に起きた謎の現象を起こした本人、現在は瑞穂学園に入学はしているものの不登校。精神的なダメージが深いらしくあまり喋らない性格。能力のコントロールがうまくできず暴走の危険があるため自分でストッパーをかけている。

?8石上総一郎 いしがみそういちろう

身長165?体重49?A型 生年月日1月29日 髪色 白

7年前のテロ収束後の孤児院で帝人に出会い世話をしなんとか話せるようにした人。現在は『溪流の家』の管理をしている。

能力の詳細

『シマドープレーヤー影を操る者』

影を一定時間操ることができる、用途は様々で剣、盾、弓等を『創る』事ができる。また影の中を移動することもできて隠密性に長けている。能力使用時間は10分でインターバルが5分かかる。

『エレクトロソード
雷の斬鉄剣』

所有者の雷上龍刃は刀に強力な雷を纏わせる事により最強の切れ味を誇っていた。能力者個人が刀にしか雷を纏わせることしかできなくて他への応用は難しい。

『エアロシールド
風の盾』

風を自在に操ることができ、そのため所有者の風峰弓華は遠距離からの攻撃に邪魔な風を100%取り除くことにより遠距離からの攻撃を得意としている。本来、風での攻撃もできるのだがそれを使うと味方まで巻き込み災害級の被害がでるため、あまりつかうことはない。

『重力ヒーリリリース
重力からの解放』

あまり正確な情報はなく現在は重力から解放し、浮かすというしかわかっていない

人物紹介（後書き）

登場人物がイメージしやすいように身長などをいれましたが、他にも入れてほしいものがあれば言ってください。できるかぎりやりたいと思います。

遅刻と鬼

朝起きたら時間は6時だったまだ寝れると考えた俺、雷上帝人らしいじょうみかどは二度寝に突入した

ただ今の時刻は9時半、今日から高校生だ入学式は8時から、その後には組み分けがある、クラスは全部で9クラス、組分けの内容は不明でその結果によってF、E、D、C、B、A、S、SSのどれかに入る9時半は組み分けが終わる時間だ、その時間に間に合えなかった者はunknown通称Uクラス、正体不明のクラスに入る「あゝあ、俺絶対うしろうなあゝ」

ここはバスの中の1番後ろの席だもう30分程で瑞穂学園に着く瑞穂学園は日本に5つしかない戦闘機動隊学園の一つで6年前創設された学校である

そもそもこの学校が作られることになった理由は7年前全国同時多発テロが起こったからである、その時の数は3000個以上この時の負傷者、死傷者はあわせて1万人に上り、犯人は5000人以上いたしかしリーダーはつかまっていない

そうこうしている内に瑞穂学園に着いたバスからおりると改めてこの学園の大きさに驚いた、中等部の入学式の時も思ったことだ

「なゝにつつたてんだよ、帝人」

後ろから声が聞こえた、振り向くと

「なんだお前も遅刻か？」

「そーなんだよ、どーも朝に弱くてなあー」

「ていうことは、またお前と同じクラスか」

こいつは島茨大輔 しまいばらだいすけ 中等部でも同じクラスだ

った奴で、いわゆる悪友ってやつだ

「とりあえず職員室いこうぜ、。。」

大輔が言った、かるく声が震えている

「ああ、。、なにさせられんのかな？」

戦闘機動隊といえど学校、罰則はあるだろう

「うちの教師には鬼がいるからな、。、入学式の片付けをやれ、なんて言われそうだなあー」

そんな予想をたてながら職員室に行った

職員室に着くと15、6人の生徒が正座させられていた、そのまえには鬼の角をはやした教師、鬼嶋 きじま がいた

「ほおー次は雷上と島茨かどうしたつつたってないでこっちにこいよ」

「帝人」

「大輔」

2人は同時に呼び合い

「逃げるぞ」

と言い全力で走った

「まったく、無駄なことをしおって」

2人を引きずりながら言った

職員室に着くと+5増えた合計22人の生徒が居た、そして腕時計を見て

「ん、もう少しだがまあいい、お前等！体育館に行って入学式の片付けをやってこい！」

「。。」

どうやら全員同じ予想をたてていたようだ

こうして入学初日が始まった

過去の地獄

「まさか、本当に入学式の片付けをやらされるとは」

ここは体育館、3000人は入れるドでかいホールだそれを20人ちよいの人数でやれと言うのむちゃだったそれを

『12時までには終わらせる！』

と鬼が言った、今の時刻は11時あと1時間しかない

「いつそのことばつくて逃げるか」

と大輔が言った

「そんなことしたらまた鬼に地獄をみせられるぞ」

「うっ、そうだなあんなのは二度と御免だ、。。。」

「なにをされたの？」

話しかけてきたのは知らない奴だった、見て見たら女子だったしかも美少女のその姿は天使を思わせるような白銀の髪をしていた

「どちらさま？」

帝人が口を開く前に大輔が目を輝かして言った

「あつ私は東城優香　とうじょうゆうか　といいます今年アメリカから帰ってきました」

「初めまして優香さん俺の名前は雷上帝人、こっちのバカは島茨大輔だ」

こんどは大輔が言う前に帝人が話した

「だれがバカだ」

「お前以外にいるかド阿呆」

睨みあっていると優香がとめてくれた

「あの、やめてください2人とも喧嘩はよくないです」

「ほっとけばいいのよそのバカどもは、なに言っても止まらないん

だから」

そう言ったのは中等部でも一緒だった女子だった特徴は赤い目で髪は赤髪でちょい長めのポニーテールスタイルは上の下というところだ
「なんだ西条もウクラスだったのか」

「そうなのよ、もう最悪まさか寝過ぐすとは思ってもなかったわ、
そうだ東城さんだっけ私は西条三波　さいじょうみなみ　よろしく
ね」

「あつよろしくお願いします、、それでなにをやったんですか？
そついうと大輔が説明を始めた

瑞穂学園中等部の朝9時、廊下では帝人と大輔が大爆走をしていた、
後ろに100匹程の犬をつれて

「なにやらかしてんだ大輔、家をぶつ壊しやがって」
家とは後ろの犬の家のことだ

「しょうがねえだろまちがえてあたっちまったんだから」
遅刻しそうになっていた2人が最短ルートとしてえらんだのが犬の
家がある敷地だった、この学園には訓練用の犬が100以上飼って
いた、しかも元野良がほとんどであつてとても凶暴

「またお前等か雷上に島茨2人共後でたっぷり指導してやるから覚
悟しておけ！」

前から鬼こと教師鬼嶋が現れた

「くそつ前には鬼、後ろには狂犬どっちを選んでも地獄だぞ」
「突撃しかない、大輔お前武器は？」

この学園では随時武器の携帯が許可されているむしろ校則だった

「ハンドガンが2丁とナイフが5本だ、帝人は？」

「マシンガンが1丁と手榴弾が3つだ」

「よし、じゃあ帝人が手榴弾を犬に1つ投げてその爆風に紛れて窓
から跳ぶぞ」

「わかった、3秒後だ3 / 2 / 1 / それっ」

「ドカアーリーン」

爆音が放たれた

「行くぞ」

つぎの瞬間窓から跳んだ。そのとき首が突然引っ張られたいやな予感がして振り向くと

「逃がさんぞ、貴様等」

その顔は鬼そのもので角まで見えた気がした帝人と大輔だった

「そのあとどうなったんですか？」

「鬼の特別指導と地獄の訓練をさせられて途中で意識がなくなった」
大輔は思い出したのか吐き気がして口を押えていた

とにかく絶対にあいつに捕まらないようにしようとしてここにいる全員が思った

される、異力機動隊はいわゆる超能力であるこれは生まれながらの才能でいまだ詳しいことは解明されていない

余談だが鬼嶋はこの異力機動隊以外の全ての部隊に所属経験があり文字どりの化物である

そんなこんなで大輔の番がきた、その次は帝人だ

「島茨大輔だ、所属希望は制圧と戦略だ、以上」

大輔は中等部の時戦略の成績はオールSだ、ちなみに希望部隊は何個でもいい

「雷上帝人です、希望部隊は制圧と隠密と異力です」

自慢じゃないが帝人には生まれながら妙な力がある、なんの力かはその内わかるだろう

そのまま自己紹介が続いていき優香の番になった

「東城優香と言います、所属希望部隊は特殊です」

次は三波だ

「西条三波、希望部隊は特殊よ」

短い自己紹介が終わった

「これで全員か、あと4〜5人増えるかもしれないのでそのつもりで、では次は校則などが基本的問題をおこさなければ関係ないあゝ、あと島茨と雷上はノートに書き取りをして提出をするように」

「「なんで俺等だけ書き取り!?!」」

「それはお前等がバカだからだ」

理不尽だだが鬼は殺気が籠っていきそうな目で睨んできたのでしかたなく納得した

「あとは〜代表決めだがそれは後でいい」

「いや、代表は俺がやる」

突然大輔がいった、たしかにあいつは戦略の主席だった奴だから適任だな

「他に異論がなければそれでいい」

「では次は一月か月ごとにある機動隊戦闘戦争、通称機動戦についてだ」

ルール

(機動隊戦闘戦争か、基本的なことは中等部で少し聞いたがくわしいことは知らないからな)

「え、まず基本的なことからだ。機動戦は各クラスの代表を標的として、なんでもありのがちんこバトルだ」

おそろしく適当な説明だが、みんな鬼の逆鱗にふれたくないのかだれも口を開かない、それに満足したのか話を続けた

「なんでもありと言っても死なないうよう防御に関しては最善のものがあるから安心しておけ」

生徒の制服は防弾性能があり、刺されても貫けないし、なぜか毒も効かないさらに性能が増しているという噂がある

「ルールは主に3つある。1つ代表を抑えた時点で戦闘終了、2つ制服に接続されている特殊な機械によってダメージが蓄積されていき致命傷に達したとき脱落になる、3つ殺すな、誰がなんと言おうと殺すな、それだけだ。あとそれぞれ細かいルールがあるが、それは生徒手帳を読んでおけ」

生徒手帳には機動戦の決まりや校則等が辞典のように何ページも書かれている、電子機能搭載型だからうすいカードみたいなものだ

「質問があるやつは？」

「はい、機動戦に勝つとなにかあるのか？」

質問したのは大輔だ、確かに勝って何も無いなんてことはないはずだ

「それに関しては学園長しか知らない、あの人は恐ろしく何を考えているかわからんからな、俺が聞いても楽しみにしておけとしか言わんのだ、まっそういうことだ」

「そうか、じゃあ楽しみにしておこうかな」

そうしておけ、と鬼が言いそのままHRは終わった、最後にこんな言葉を残して

「ねんを押ししておいていやるもし問題を起こした場合、、、死を覚悟しておけ」

「最後の言葉は俺と帝人に向けられたと思うぞ、、。」
不吉なこと言うやつだ

「ま、まさかそんなわけないだろう、それより大輔なんで代表に立候補したんだ？」

確かに戦略の主席で適任ではあるけど、こいつが理由がなくめんどくさいことはやるはずがない

「ん、そんなの決まっているだろう、お前この面子を見てどう思う？」

「この面子って、元戦略の主席の大輔に、特殊の『破壊の女王』の二つ名を持つ三波がいるな」

厨二臭いが訓練では障害物を全て粉々にして進んだ言う伝説がある
「あんまりその名前は好きではないんだけどね」

三波が言うむしろ好きなやつがいるほうだ驚きだ。大輔は続けて言った

「そうだ、俺はなんとしても復讐しなきゃいけないやつがいるんだ、そのためにもここで勝って色々準備しなきゃいけないからな」

大輔には7年前のテロで両親を亡くしている

「っというわけでお前等を利用してもらう」

「まあ、確かにテロの事に関しては俺もなにもかんじないわけじゃないからな」

この学園の半分以上の人はテロで親が殺されているそういう事もあってこの学園は寮生活をする事ができる

「暗い話はやめにして、これから学園を回ってみませんか？」

優香が空気をかえようと提案してきた

「いいね、行ってみようか」

遅刻に片付けのせいで学園の中は知らないしな

「そうだな、行くか」

訓練施設（前書き）

更新が遅れて申し訳ありません

訓練施設

「それにしても、、、バカみたいに広いな」

教室を出てまずは学園の地図を探してとりあえず外から回ることに
なった

外と言うとグラウンドが代表的だがこの学園はグラウンドどころの
騒ぎではない

それは、、、。

「なんだ、このピラミッドみたいな建物は??」

ここは校舎から100メートルくらい離れた場所だ

「パンフレットによると大規模集団戦闘訓練場、通称「大戦場」と
言われる場所だそうです」

優香が説明してくれた、ちなみにパンフレットは玄関にあった物を
パクって来た

「中は迷路になっていて、その中をチームで進みながら戦闘を行う
らしいです」

つづけて優香が説明してくれた

「機動隊戦闘戦争を行う場所としても使われる事もあるみたいね」
三波もつづけて言った

「これだけバカデカイ施設を造るのにどれだけ金使ったんだよ」

「これほど大きい施設なら10億くらいかっちまうんじゃないか」

帝人の疑問に大輔が答えた

そんなに金があるなら他のことにつかえばいいのにと思わなくもないがここまで影響をあたえたテロもすごいもんだと感心しつつ

「他にもこんな施設があるのか？」

「え〜とですね、他には水中戦闘訓練場なんてものと空中戦闘訓練施設なんてものもあるし、宇宙空間戦闘訓練施設なんてものまであるみたいですね」

優香がパンフレットを読んで説明した

「しかも、まだ建設途中のものまであるなんてまったく日本の借金いくらあると思ってるのかねまったく」

大輔が続けて愚痴を漏らした

そんな話していると広い場所に出てきた

「なんだよこれ？」

「これはなんだ？」

「なんですかこれは？」

「なによこれ？」

だれもがそう思うだろう、目の前にあるのは森だったしかもただの森ではない、それは

「なんで木が燃えてんの!？」

「なんで木が凍ってんの!？」

「なんで木の葉っぱが針になっているんですか??」

「なんで水のないのに鮫がいるのよ!？」

全員が違う反応をしたそれもそのはずだ数えだしたらきりがないほどのおかしなところがある、木は燃えているにも関わらず葉や枝しか燃えておらずしかも燃え尽きる気配が全くない、凍った木はまるで剣のように尖っていて指くらいならスッパリ切れそうだが、葉が針の木は木全体が針で根っこみたいなものが地面から出ているがほんなものまで針の覆われていた、あげくの果てが水もないのに地面を泳いでいる? 鮫だ

「なんだここはパンフレットにはなんて書いてあるんだ?」

「え〜と、多重戦闘想定区域って書いてありますが現在は使用禁止だそうです」

「あたりまえだあんな得体の知れない森まで訓練施設されたらたまったもんじゃねーよ」

大輔がそう言うといきなり森のほうから声がした、

「ん?、、、なんだお前等新入生か?」

声のした方に顔を向けるとそこには身長2メートル程の大男がいた、
、、、血だらけの。

訓練施設（後書き）

また更新が遅れるかもしれない

できたら応援のメッセージをくれるとありがたいです
感想でも可です

雷上龍刃

「な、なんだあんなんで血、血だらけなんだ!!」

いきなり目の前に血だらけの人間がいたら人間は色々な反応をする。たとえばとつさに相手の眉間に銃をつきつけたり、見た瞬間に腰が抜けてたてなくなったり、相手に攻撃するために構えて地面にある石を粉々に踏み砕いたり、ただぼーと突っ立っていたりする。

「そんなに怯えなくてもいいだろ、なにも獲って食うなんてことしないねーよ」

大男が喋った

「あゝあとこの血は返り血だから俺の血じゃねーから安心しろ」

「あんた何もんだ?」

大輔が質問した。その問いに答えたのは帝人だった

「この人は雷上龍刃 らいじょうりゅうは 俺の兄貴だ」

「えー!! 帝人君お兄さんいたんですか!?!」

やっと立てるようになった優香が驚いていた。ちなみに先ほど腰が抜けて立てなくなったのは優香だ

「おっなんだ帝人も居たのか、しかし帝人お前小っさいまだまだなほんとに高校生かよ」

「あんたがでかいんだろむしろ高校2年でそのでかさの方が驚きだ、てか実の弟の顔ぐらい覚えとけドアホ」

「ドアホとはなんだドアホとは! まがりなりにも兄貴だぞ! もちつと尊敬つてもんはねーのかチビすけ!」

「あんたのどこに尊敬できるところがあるこの木偶の坊が!」

さすがに止めた方がいいと思ったのか三波が言い出した

「止めなくていいの？」

つづけて優香も

「そうですね。止めなくていいんですか？ 島茨君」

「あれを止めるのは至難の技だぞ。ここはおとなしく鬼を呼んだ方が手っ取り早くすむ、まってる今電w」

「ちよつとまったああああー！！その必要はない」

仲良く声を揃えて言った

「とにかくその必要はない。ささ、こんな奴ほつといて次行こうぜ、なっ？」

「いやせつかくだ、龍刃さんに学園を案内してもらおう。いいすかつ龍刃さん？」

「ん〜そうだな、生徒会室までの道のりで案内できるところならいいぞ。」

「え〜まじかよ。アニキバカだから迷うかもしんないぞ」

また怒鳴りかえそうとしたが、鬼を呼ばれることを嫌がったのかセリフを飲み込んだ

「じゃあ学園の中を案内してやろう。」

そう言つて龍刃は学園への入口へと歩き出そうとしたら

「その前に血を拭いてください！！」
つと優香が叫んだ

「ここが、職員室だ、まあ鬼嶋が居るからあんま近づかないほうがいいぞ。とつそこが保健室だこの学園に居たらここには世話になるから覚えておけ。」

無事に血を拭いて案内を始めて、そんなこんなで歩いていくと生徒会室に到着した

「ここが生徒会室だ、なんかの縁だちよつと生徒会長様にでもあい

さっしとけ。」

そう言って答えを返す前にドアが開けられた

「遅いぞバカ立ち入り禁止区域の掃除を命じてから何分たっている
と思ってるの！」

ドアを開けた瞬間、黒髪で巨乳の大和撫子と言える超美人に怒鳴られた

風峰弓華

ドアを開けた瞬間、黒髪で巨乳の大和撫子と言える超美人に怒鳴られた

「まてまて、こいつらを学園を案内しながら来たもんでちつとばかり遅れたんだよ。」

(このバカアニキこのために俺達をここまで連れてきたな!?)

龍刃の意図に気付いた帝人だったが時既に遅しドアは既に閉ざされていた。改めて生徒会長を見ると、肩より長く伸ばした黒く光る髪、何を着ても似合いそうなスタイル、そしてなんといつても大きく突き出したように出ている大きな胸。他の面々を見てみると優香と三波は黒髪美人生徒会長の大きく突き出された胸を恨めしそうに見ていた。大輔はというと、なぜか顔を真っ赤にしてガッツポーズを決めていた。

「なんだあそんなこと、でっとうだったのかしら？禁止区域の様子は？」

「なんも、ちよつとばかり鮫野郎どもが大量発生してたから絶滅しない程度に片づけてきた。」

「そう、なんで餌もそんなにないはずなのに大量発生したのかしらね？」

「さあな、どこぞのバカがなんかやったんじゃないか」

そんな意味不明な会話を繰り返していた二人に割り込むように帝人が口を出した

「おいアニキ説明をしてくれ、このままじゃ俺達は背景と化しちまう」

「お、そうだったな。おい生徒会長様、自己紹介してくれ」

「私は瑞穂学園の生徒会長をしている風峰弓華かざみねきょうか、よろしく新入生諸君」

「あつ私は東城優一」

「あゝ自己紹介はしなくていいわよ優香ちゃん。三波ちゃんに大輔君、それと帝人君でしょ。」

自己紹介をしてもいないのに全員の名前を言いあてた

「なっなんで俺達の名前を知っているんですか!?!」

大輔が驚きの声をあげた

「なんでって生徒会長なのよ私、生徒の名前くらい覚えるわよ。普通」

いや、覚えてんのはおまえぐらいだつと龍刃がつつこんだが無視されはなしがつづけられた

「でっ今日は何用でここにきたのかしら?」

「いやアニキに生徒会長に挨拶してけと言われたので・・・。」

言われたことを正確に説明した。それを聞いた弓華は

「ふくん、なるほどつまりあなた達を遅刻した言い訳にしようとしてここまで連れてきたと。」

「なっなぜばれた」

「あたりまえでしょ、低脳な龍刃のことだもん、どーせそんなことだろうなって予想してたわよ。それじゃあこのまま他の仕事もしてもらおうかしらね、良いわよね？龍刃君？」

反論しようとした龍刃だったが弓華に睨まれて仕方なく首を縦に振った。

「じゃあ、あなたたちはどうする？たしかそろそろ寮の組み分けがあるころじゃなかった」

「あれ、もうそんな時間ですか？じゃあそろそろ終わりにして帰るとしますか。」

「そうだな。」

そう言っつて帝人は弓華と龍刃に礼を言っつて生徒会室をあとにした。

「戦略の？1と龍刃の弟かあ、おもしろい子達が入ってきたわねえ」

頼み

ここは1年の寮のある1室そこに帝人と大輔がいた。

「なぜこうなった?」

その疑問の訳は30分前にさかのぼる

寮の組み分けは大食堂の壁に掛けられていた

「俺の名前は、あそこかなになに、同居人は、島茨大輔ってまたおまえかよ!」

中等部時代も大輔と同じだった帝人は驚きの声をあげた

「まあ、どうせそんなことだろうなと思ってたけどまさかほんとにこうなるとは」

そこに寮監らしき人が来た

「あんた達が雷上と島茨だね、鬼嶋先生から聞いていた通りのいかにも『問題児』って顔だね、あんた達は一緒にしておいたほうがなにかと楽だから一緒の部屋にしておいたからくれぐれも問題は起こすなよ、もし起きた時は時間は関係なく鬼嶋先生に電話するから覚悟しておきなさい。あ、それと鬼嶋先生から伝言であとであんた達の部屋に行くからそのつもりでこのことらしいよ。」

そう言い終えて寮監はどこかに去って行った。

そうして今の現状に戻る

「よしとりあえず荷物を片づけよう……。」

今、部屋の中は雑誌やら教科書やらが散乱している

15分後、現在時間は9時30分、目の前には鬼こと鬼嶋先生がいる。

「俺がこの部屋に来た理由は解っているか？」

その質問に黙っていると話は進められた

「解っていないとして話を進めるぞ。とりあえず前おきとしてお前等はunknownクラスの本当の意味を知っているか。あれはこの学園が作られた当時からあるいわゆる『問題児』の集まりだどういわけかunknownクラスに入る奴等はほとんど遅刻してくる。まあそれはおいといて、お前等に一つ頼みがあるunknownには不登校の奴等もいるんだがその中に一人に木祖島^{きそじまかみと}神人というやつがいるんだが、訳ありの生徒でなそいつの面倒を見てやってくれないか、とりあえず部屋はお前等と同じにしてあるから拒否権はない」

長い説明をした鬼嶋は答えを聞く前に紙を渡してきた

「こいつはその木祖島の資料だ、まちがってもなくしたりだれかにみせるなよ」

渡された紙にはこう書かれていた

『グラビティリリース
重力からの解放』

「おいこいつは・・・」

「お前等も知っているだろう7年前のテロの時の謎の現象があったことを、それは全てこの木祖島がやったことだ」

7年前のテロの時長野県のある町で不可解な事が起きていたそれは物が浮くなどの現象だった大規模な所では湖や川の水が全て浮いている等という一歩まちがえたら大惨事になることだった。

「その詳細がそこに書かれている」

報告書

資料には『木祖島神人および』グラビティリリース『重力からの解放』に関する報告書』
という題名で始められていた。

【木祖島神人はテロ発生時に家族を殺されそのショックで能力が開花し、暴走したと考えられる。能力の詳細は暴走時の現象から推測するに物体の重さは関係なく、重力そのものを操るものだと言われた。能力使用時の木祖島の様子は正確なものはないが、情報によると理性を失い気を失った状態で能力を使っていたとされる。テロ収束後、国の監視下のもと治療および検査を受けたが、一言も喋ろうとはせず担当医の話によると「精神的なダメージが図りしれない」というものだ。能力に関することは前記のこと以外はわかっていない。退院後は瑞穂学園中等部に入学したが一度も登校した記録はない。】
資料を読み終えた帝人は鬼嶋の顔を見てこう言った

「先生あんたこれ知ってたのか？」

「知ったのは先日Uクラスの担任を任された時に学園長に言われ聞かされた。ちなみにこのことをお前等に任せると言ったのも学園長だ。」

その言葉を聞いた大輔はぶつぶつと「あのババアがそんなことを・・・」と言っていたが鬼嶋には聞こえなかったらしい

「ところでその木祖島てのは今どこに住んでいるんだ？」

「今は国が管理する『溪流の家』というテロの孤児が居る施設に居

るらしい。」

らしい、というのだから確証はないのだろう

「じゃあ何時会いにいけばいいんだ？」

「基本的には国の機密に関することだからな、とりあえず明日は学園を休んでさっそく『溪流の家』に行つてくれ。」

国の機密ということはそれなりの覚悟を持ってやらなければ痛い目に合うという、脅しも含められた発言だろう

そこから『溪流の家』の住所を聞き鬼嶋は部屋を後にした、しかし帰り際に

「いちよう気を付けていつこい」

その言葉を聞いた帝人と大輔は鬼嶋が居なくなったことをしっかりと確認し?????

「「気持ち悪ーーーーー」という悲痛な叫びを轟かした

翌日の朝、『溪流の家』のある長野県に帝人と大輔は出発した。

報告書（後書き）

あけましておめでとうございます。
今後ともどうぞかよろしくおねがいします。

『溪流の家』

ここは長野県中部のとある山のなか、その中を帝人と大輔は歩いて
いた。

「くそっなんでこんな山の中に孤児院つくるんだよ、かれこれ1時
間は歩いてるぞ」

そんな愚痴を言っている大輔に対して、帝人は汗を拭きながら答え
た。

「テロのトラウマを少しでも軽減しようとしたんだろ、おまえにだ
ってわかるだろ」

テロでうけた心の傷は計り知れない。いつもどりの日常になるは
ずだったのにいきなり現れたテロ集団に目の前で親や兄弟を殺され
たのだ、むしろ心に傷を負わないほうができるわけがないのだ。

実際、帝人や大輔もこの道を歩みやつとのことで乗り越えたこと
だった。

「おっあれじゃね」

見えてきた建物は自然に囲まれた心が癒されるような建物だった。
建物への道の脇に『溪流の家』という看板が立っていた

「あれか、すげーな横に川が流れてるぞいかにも溪流って感じがす
るわ」

それから少し歩いて入口から中に入ると誰かがこちらへ歩いてきた

「ようこそいらっしやいました。あなたが瑞穂学園より連絡があった雷上様と島茨様ですね。どうぞこちらへ」

とても丁寧な対応に圧倒されながらも、その人についていくために歩いていく

「こちらで少しおまちください。」

案内されたのは応接室らしき部屋だった。家具はソファアが2つにその間にテーブルがあり花瓶にきれいな花がおいてあった。

5分後そのソファアに座っていると、優しい顔立ちをした老人が入ってきた

「やあやあ君たちが瑞穂学園の生徒さんだね。私はここの管理をしている石上いしがみという者だ」

そこで言葉を切り

「久しぶりだね雷上帝人君、大きくなったなああの時の君とは大違いだな」

「お久しぶりです石上さん。今はこちらの孤児院に務めていたんですね。」

帝人は昔、一か月間だけ孤児院にいたことがある、その時は帝人がテロのショックで喋ることができず、身元の確認ができなかったその時に帝人の世話をしてなんとか喋れるところまで回復させてくれたのが石上であった

「まあこのことはまたの機会に、それで君たちは木祖島神人に会いに来たんだね。ここで話してもいいが直接見てから話したほうがいいだろう、ついてきたまえ」

そう言って出口に向かい廊下にて歩いて2、3分の所に木祖島が居た

「見てわかるように木祖島神人は喋れる状態ではない」

木祖島は白の手術着を着てベット座り真っ直ぐ前を見ていた。

いや目はたしかに前を見ているが目に生気が感じられないまるで生きていることになんの意味もないようなそんな目だった

「木祖島はここに来る前からいやテロ発生時から一言も口をきいていない。」

作戦Aから作戦Bへ(前書き)

すみません『石上』のところを『石田』と書いてしまいました

作戦Aから作戦Bへ

「おい、帝人あれは予想以上にまずいぞ」

「ああ、おれもあそこまではひどくはなかったはずだ」

ここに来る前ということは7年前から喋ってないということになる
それは心が壊れていることに等しい

それにいち早く気付いた大輔は石上に聞いた

「あなたどんな治療を行っていますか？」

「基本的には毎日話しかけたり、外を散歩したり、たまに一緒に食事したり、と様々な方法で治療しているのだが・・・」

そう答えた石上は最後にこう聞いた

「君たちは木祖島君をどうするつもりなんだね？」

「学園長からの頼みもとい命令ですから、とりあえずこの『溪流の家』から瑞穂学園の寮に入ってもらいます。それから色々な方法を試していきたいと思ってます。ですが、なぜそんなことを聞くんです、石上さん」

「いや、医者としてここに居る子達のケアをするのが私の役目だからね、最後まで面倒を見たいというのが本音なんだよ」

「そうなんですか、ですがこちらも引くわけにわいかないのですみませんがあきらめてください。」

そう言い切つて大輔は木祖島の部屋に入った

「少し瞳孔を見ますがいいですか？」

「かまわんよ」

答えを聞いた大輔は持っていたペンライトを当てて木祖島の目を見た、しばらくしてライトをしまった大輔は帝人に告げた

「帝人、作戦Aから作戦Bに変更だ」

そう言い切つた直後帝人は木祖島の肩を持ち、大輔はポケットから閃光弾を取り出し迷わずそれを投げた。

次の瞬間ものすごい光を出した閃光弾は数秒間光つづけた

「なっなんだ、どうなったんだ」

一瞬の出来事にまったく動くことができず、数秒後やっと目が開くようになった。しかし前には誰もいなかったよく見ると窓が全開で開いていた、それを見た石上は携帯を取り出しこう言った

「瑞穂学園雷上帝人、島茨大輔が被験者木祖島神人を連れて逃亡した。木祖島神人は無傷で回収しろ、瑞穂学園の方はどうなってもいい、いや殺せ」

ここは木祖島の部屋から10メートルぐらい離れた森の中

「っで、どうだったんだまあ大体予想はたってるけど、詳細を教え

てくれ」

「瞳孔を見た限りあの状態なら普通の瞳孔だった、だがこのコンタクトで見たかぎりあきらかに薬を使った形跡があった」

大輔と帝人はここに来る前のバスの中である仮説を本に作戦を立てていた。その内容は大輔がコンタクトを使い問題なければそのまま連れてくる、問題がある場合は木祖島神人を即回収し逃亡、というものだった。前者は作戦Aで後者は作戦Bだ。

「じゃあ予定どつりに俺が身を隠しながらふもとまで行くか」

この後の行動は帝人が自分の能力『影シャドープレイヤーを操る者』を使いの2人は隠しながらふもとまで行く予定だ

「木祖島の様子はどうだ？」

「今のところは気を失ってる、薬の影響もある一刻も早く瑞穂学園に連れて帰るぞ」

逃走中

「よしっじゃあ行くぞ」

そう言つて帝人が木の影に他の2人を溶け込ませた。

次に3人が現れたのは5メートル先の岩の影

「?、どうした帝人早く行こうぜ」

「いや、どうやら追手がきたようだ。どうする大輔」

そう言つた数秒後、迷彩服に身を包んだ男達が3人現れた、手にマシガンらしきものを持つて

「そうだな、とりあえずプランAからプランCだ」

「了解」

短く答えた帝人は次の瞬間、姿が見えなくなった、正確には迷彩服の男達のゴーグルが見えなくなった

「なっ!?!」

一瞬パニックになった男達だったがゴーグルを外して事なきを得た。だが次に襲ってきたのは激しい眠気だった。

ボタンつと倒れた男達はまだかろうじて意識があり目の前の帝人達の会話が聞こえた

「おーすげーなこの即効性の睡眠弾、もう寝たぞ」

「よし、次だこいつらだけじゃない、おそらく相手は人界戦術で捜索してるはやく次のポイントまで移動するぞ」

帝人達は『溪流の家』に行く前にこの場所の地形データを確認しながら来た。それにより逃走ルート等をあらかじめ決め、さらにその逃走中のプランをAからCまで立てていた。そのため相手の人数と時間を計算してそれにあつた行動をするため様々な対策を練っていた。

「次はどこだっけ？」

「次は20メートル先の岩の影だ」

「了解」

言い終わった瞬間3人は再度姿が消えた

「あとどれぐらいだ、俺の能力も後3、4分が限界だぞ」

ここはさっきの所から100メートル程先のポイントにいた

「もう少しだ、あと少しで最終ポイントに着くはずだ」

最終ポイントにはあらかじめ用意しておいた車が置いてある。戦闘機動隊学園の生徒は車やバイク、小型の船等の運転免許を持っている、これ等は7年前ではありえないことだがテロ以降に法律が改正

され戦闘機動隊学園では教育として教えられている。

あれから何度か襲撃されたがなんとか無力化して進んでいた

「じゃあ、もう行けるか？」

「もう少しまで、あと少しで現在位置の確認と煙散器ストーカーが設置できる」

大輔は各ポイントに煙散器ストーカーと言う装置を設置していた、これはリモコン式で煙を撒くことができる装置だ、いわゆるけむり玉を改造して作られたものだ。それと同時に現在位置を正確に確認しそれをダウンロードし3Dマップに表示していた。本来なら一回で大丈夫なのだが山の中という事なのか正確な情報がとれないのでその位置ごとに確認しているのだ。

「よし、OKだ行くぞあと30メートルだ」

「うっっじゃー」

途中で帝人の言葉が切れた、その理由は・・・

『ひどいじゃないか、突然木祖島君を連れていなくなるとは』

機動機械（アーマードマシン）

前には石上がいた、正確にはなにかに乗っている石上がいた

「ちつ聞いたことがある、国が新しい『機動機械』^{アーマードマシン}を開発したと」

『まだ試作型だけだね、これでも乗り心地は最高だよ30歳ほど若返った気分だ』

帝人達は本来、木祖島を迎えに来たのだ機動機械を壊すための装備なんてものはもっていない、そう思った石上は最近支給された機動機械^{アーマードマシン}に乗ってきたのだ。

「帝人時間を稼いでくれ！そのあいだに俺が準備を整える」

「了解」

言い終えた直後、石上が乗っていた機動機械^{アーマードマシン}の回りに黒い剣や槍、斧、刀、槌、矛、等様々な武器が現れた数はおよそにして500動けば間違いないく串刺しにされる。

「さしてどうする石上、一歩でも動いたら串刺し確定だぞ、いくら機動機械^{アーマードマシン}ついてもこれだけの数の武器はさすがに防げねえだろ。」

『たしかにこれだけの数は防げないだろう、だが帝人君、君の能力には使用時間が限られていたね、見たところここまでくるのに相当時間を食ってるみたいだね、ということは残りはあと1分が限界だろう。』

たしかに帝人にはあと1分程しか時間がない。

このまま石上がアイマードマシン機動機械の中に居れば勝手に帝人の能力が切れる。だが石上の言葉に対する帝人の言葉は石上の考えていたようなものではなかった。

「たしかにそうだな、じゃあ今この瞬間で串刺しになっとくか」

どこか帝人とはちがう声だった、重みがあり、頭に直接響くような恐ろしい声。

よく見ると目の色が黒から鮮やかな血のような赤色になった。

『なっ！！』

「おら、まずは足からいつてみようかあ？いや。時間もねえし、真ん中にぐさりといつとくかあ？」

『まつ待て！わかった、出る、出るから』

石上には帝人の声が悪魔の声に聞こえてくるようになった

「聞こえねえなあ、じゃあな石上い！！」

最後の帝人の声は石上には届いてなかった、石上は泡を吹きながら気絶していた。

一瞬遅れて帝人の『シャドープレイヤー影を操る者』で創られた武器も消滅した。さらに遅れて目の色も元に戻った。

「帝人、おまえ絶対Sだろ、いや『ド』がつくSだろ」

「やべっまたやっちまったか、ああなると軽く意識が飛んでるからな。」

「ああ、なんだっけ？お前の一族のあれで『バーサーカーモード戦闘狂』だっけ？」

「そうなんだよ、普段はあんまでないんだけどな」

そんな言葉を聞きながら大輔が石上をアイマードマシン機動機械から出した。

「うわ、泡吹いてるぞ、どんだけ怯えてたんだよ」

「そういえば、なんの準備してたんだ？」

「ん、なんもしてないぞ」

その言葉を聞いた帝人は再び目が赤く染まった。

「よぉ〜し、まずはあそこにひざまずいてもらおうかあ。」

「いやっ、待て帝人、気をしっかり持て！」

そんな言葉が山で響き渡った。

記憶喪失

『わかった、とりあえず今日はどこかで休んで明日学園に帰ってこい』

「ちよいまち、あのー、鬼嶋先生？俺達金なんかもってないけど。」

『んーそうだったか、じゃあサバイバル実習と思ってかんばれ』

「おいまて木祖島だっているんだぞ、せめてなにか、なにかないのか？」

『しょうがない、今から東城と西条をそっちに送る。実はな今日の朝から2人が帝人と大輔はどうしたのかとうるさくてな、とりあえずある程度の荷物を持たせて送るからそれでなんとか持ちこたえろ。あと木祖島の件についてはお前が説明しておけ』

「言ってもいいのか？」

『ちゃんと口止めしておけよ。それと学園に帰ってきたら報告書を提出するように』

「りょーかーい」

返事をして電話を切り大輔が帝人に説明する

「わかった、石上については説明したのか？」

「身柄は学園の宅配に任せとけだと、あと帰ったら報告書を出せと

さ

学園には専用の運び屋がいるそれは何かと問題のある物を運ぶためにつくられた部隊だ

宅配は10分後に来た。

さらに20分後、優香と三波がなにかの荷物を持って帝人達の所へやってきた、やってくるなり三波が・・・

「帝人！大輔！ちゃんと説明してくれるんでしょうね！」

大輔が説明中・・・・・・・・・・

「そういうことね、でっその木祖島はどこにいるの？」

「むこうで眠って「誰か僕のことよんだ？」起きたー！？」

「ねえあなた達誰？それから僕は誰？」

「記憶がないのか？」

大輔がおそろおそろ聞くような感じで尋ねた

「？、わかんない。でもものすごい長い時間眠っていた気がする。」

木祖島が意識を失ったのは7年前その時の年齢は9歳、外見は16歳だが精神的には9歳で止まっているのだろう。

「君の名前は木祖島神人だ」

「木祖島・・・神人、うっ、痛った！」

自分の名前を聞いた木祖島は突然頭を押さえた

「どうしたっ、頭が痛いのか？」

「うん、なんでだろう、名前を聞いたら急に……。」

「記憶の修復の余波じゃないか」

帝人が言った。

続けて優香もなぜか泣きながら言った

「ぐすつ、記憶がないなんて、ぐすつなんて、ぐすつ、かわいそう
な。」

「落ち着いて、ユウ今そんなこと言ってもしょうがないんだから、
ね？」

帝人と大輔は一瞬「この人誰??」と本気で思った。

今の発言は三波によるものだ。

しかし、帝人と大輔はこんな姿の三波を見たことがない、入学当
所から尖ったような性格をしていた三波がこんな言葉をかけられる
とは思ってもいなかあった。

「ユウ？」

おもわず大輔が聞いた。

「あんだ達がない間に色々あったのよ、色々……。」

「ねえ、僕お腹減っちゃった・・・。」

そう言っておなかのあたりをさする木祖島

その言葉に大輔は・・・

「めしにするか」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6329x/>

戦闘機動隊学園 Uクラス

2012年1月12日03時48分発行